

父の仕事

校長 佐藤 広明

私が通った小学校は今思うととても不思議な学校だった。昭和40年代、鉄の町北九州にあったその小学校は、学区全てが八幡製鉄所の社宅エリアであり、学校に通う小学生は全員八幡製鉄所社員の子もだった。どの友達の家に行っても同じ平屋の社宅の建物で、家の作りは全て同じ、いつも自分の家のような気がした。父親の仕事は全員製鉄所の現場作業員、三交代の勤務で朝番（朝7時ごろから勤務）、昼番（午後3時ごろから勤務）、遅番（夜10時ごろから勤務）と仕事に行く時間がシフトする。子どもたちが遊ぶ家は決まって昼番の家で、子どもたちの合言葉は「今日はお父さん何番？」だった。それは遊ぶ時間に父親がいないことを確認するためである。朝番の家では、遊んでいるうちに父親が帰ってきて遊べなくなる。遅番の家では父親が寝ていて、大声を出して遊べないのである。当時父親はどの家でも一番の存在であり、共通したイメージがあった。

毎年11月、こんな共通した父親の働く姿を、子どもたちが実体験できる日があった。起業祭という製鉄所の大きなお祭りである。この日は、たくさんの出店が町中に出て賑やかになるだけでなく、製鉄所の見学ができたのである。私はこの日をいつも神妙な気持ちで待っていた。

ストリップ工場という熱い鉄の塊を薄く延ばすところで父は働いていた。その日、工場の入口に来ると、遠くに赤々とした溶けた鉄が見えた。同時に離れていてもものすごい熱が顔面に伝わってきて、子どもながらに危険だと察した。これ以上近づけないとも感じた。しかし、溶けた鉄のそばにはたくさんの働く男の人が見えた。母から、父はあそこにいるんだよ、と告げられた。働く人のそばには山に盛られた塩が置かれ、それをなめながら仕事をするんだ、とも話を聞いた。当時なぜ塩をなめるのかわからなかったが、強烈な熱を顔で感じ、男の人が働いている姿をじっと見て、心臓がドキドキしたのを覚えている。その時、近くを通った作業員が「今の日本の国で一番大切な仕事なんだよ」とやさしくつぶやいてくれたのを覚えている。

その日、帰ってきた父はいつも以上に輝いて見えたのを覚えている。

働くことの意味や大切さを、子どもの時から理解することは大切なことです。三小では5年生が起業家教育を進め、実体験をしながら学んでいます。まずはお父さんやお母さん、家族が働く姿を見せてあげること、仕事を語ることが第一だと思います。将来の日本を担う子どもたちに、その想いをもたせられるのは、父や母、身内なのです。